に要約している。

前號余ハ既ニ美術哲學ノ目的ニ關シ聊カ講究説明シタル所ノモノハ第一此類ノ哲學ハ實際必要ナルコト第二其範圍廣濶ニシテ能ク古今東西ニ起リタル種々特體ノ美術ヲ悉皆抱括スルニ足ラサルコト第三其心理學上ヨリ能力ヲ研究シタル結果ニ由ラスシテ物體ヲ構成スルモノヽ性質ヲ基礎トス可キコト、及ヒ第四世間在來ノ稱呼ヲ盲信セスシテ自己ノ區分ト類別トヲ明示ス可キコトニ在リ論ヲ結フニ當テ余ハ美術哲學ノ第一着ニ發議ス可キ名題ハ歸納的及ヒ演繹的ノ證據ヲシテ同一ナラシムルニアル旨ヲ促シヌ

こうして後者においては「歸納的推理」の前提となる、美術を美術たらしめているところの性質を把握するために、各種の美術（特に詩歌、音楽、絵画を対象に置く）に共通し、しかも美術に特有の性質とはどのようなものであってはならないかを説いている。つまり、世上特に美術の普遍的性質と見誤られ易い八項目（㈠実用的であること、㈡技倆の程度が高いこと、㈢快楽を与えること、㈣考古的および歴史的興味を惹くこと、㈤自然物模擬に精妙なること、㈥人の意志を道徳的または宗教的正鵠に向わしめること、㈦形と色と相混化して成ること、㈧作者が思想、智力、その他一般教育を備えていること）を掲げ、「誤謬除去ノ式」により、それらが諸美術に共通する性格ないしは美術に特有の性格ではないことを論じている。この二篇の著述もフェノロサの美学の全体像を把握しようとするとき参考になる。

フェノロサは「美学及び美術史」担当と当時の本校文書類に記されている以上、美術史も講じたことが考えられるが、資料は現存していない。なお、美学講義に対する生徒の反応はまちまちで、西崖のように割合いよく聴き取っている（ノートには論旨不明としている部分もある）者はむしろ少数だったようである。溝口宗文などは次のように述べている。

フエノロサの講義は一通り筆記はしたのではあるけれども、わかるやうな年には達してゐないから、岡倉さんがそれをもぢつてみなにわかるやうに通訳して下さるけれども筆記してゐるだけて脳中たゞ空であつた。それに學科などどうでもようございますといふ人がゐるから覺えはしない。

（『古美術』第十三巻第十二号。前出）

## 岡倉覚三の「美学及び美術史」講義

フェノロサ帰国後の明治二十三年八月、岡倉覚三は幹事を免ぜられて教諭（同年十月に教授と改称）となり、フェノロサの講義を引き継いだ。同月中に規則改正も行われ、その結果、美学・美術史科目も改正され、「美術史」を普通科第二年生に週二時、「美学及び美術史」を専修科第一年生に週二時課すことになった。後者の担当は岡倉であった。前者については担当者を明記した資料が残っていないが、『東京美術学校一覧』に両者が継続授業であることが記され

ているので、やはり岡倉が担当したと推定される。なお、明治二十五年の規則改正後は予備之課程（一年間）では「美学及び美術史」を週二時課すのみとなり、同二十七年の改正では同科目を各科第一年でも週一時課すことになり、同二十九年、西洋画科設置に伴う規則改正の際にもまた変更がなされている。

『東京美術学校一覧』によれば、岡倉の担当科目は明治二十三年から同二十七年九月までが「美学及び美術史」、二十七年九月から同二十九年七月までが「美学及び美術史」「歴史」、二十九年七月より同三十一年の辞職までが「歴史」となっている。しかし、その講義の全貌を把握するに足る資料は残っていない。

## 1　美学講義

岡倉が「美学及び美術史」に於いて、或いは「美術史」と「美学及び美術史」に於いて美学、日本美術史（または東洋美術史）、西洋美術史（または泰西美術史）を講じたことは、資料の上から明らかである。この中で美学以外の講義については受講生の講義筆記ノートが数種類現存しているので、凡その内容を把握することができる。美学の内容は全く不明であるが、これについては後述の本保義太郎筆記森鷗外西洋美術史講義ノートの中に

蓋シ現今英國ノ畫論ハ概ネ「ラスキン」ノ準（ママ）スルモノニシテ「ラスキン」今ハ美術学校ノ教授タリ　前キノ吾カ美術学校長岡倉氏ノ説タル審美論亦タ「ラスキン」ニ據レル所ナルヘシ

という鷗外の言葉が記されている。また、岡倉の書いたものを読むと、ラスキンの名著「近代画家論」(Modern Painters, 1843～60) などをよく参考にしていた様子であるから、「美学」もラスキンに依拠するところが多かったのではないかと思われる。ほかに、岡倉の美学講義と関連のありそうなものを掲げるとすれば菅紀一郎（430頁）のノート「美術学校講義筆記雑草稿」中の次のメモである。

欧州ニ於ケル美術ノ意義ノ変遷ヲシメセ
美術ヲ写生的ト非写生的ト区別スルノ謬解タル理由ヲ示セ
美術ト宝物〔トの誤記か〕ノ真宝ノ関係如何

これは或いは美学の試験問題ではないかと考えられる。

ところで、岡倉の美学講義を聴いたという溝口宗文は次のように述べている。

あの有名な大學の御雇であつた米國人フエノロサが大學をやめて、美術學校へ來てからは審美學を受持つて、岡倉さんが通譯をして居られた。岡倉さん自身は別に美術史を講じて居たのだつたが、フエノロサが辭職してからは審美學も岡倉さんの受持になつた。面白かつたよ君、その岡倉さんが自分で審美學を講ずる最初の時間に、「諸君！私は審美學の講義をするが、審美學といふものは餘り役に立たぬものです」と言つたものだ。

（「現代美術の黎明期を語る」『画説』十四号。昭和十三年二月）

これを読むとあたかも岡倉が美学を不要のものであると言ったかのように受け取れるが、実際はそうではなく、制作に直接役立つものではないということを述べたまでのことだったと思われる。この点についてはフェノロサも前出「美術哲学概論」の中で「其美術家製作上直接ノ影響ヲナスコト亦甚少ナシ」と言っており、岡倉の後任森鷗外も「美学」講義で

審美学家ノ評論ヲ聞キテ作品ヲ動スヿハ作者ノ為サヽル所又為シ得ヘカラサル所ノ者タリ即チ審美学家ノ論ヤ作家ヲシテ上達セシメルニ非ラス又タ格別ニ益スルヿナ少シ……学術ハ其高尚ニ進歩スルト共ニ利益ナルモノト隔離スル者ナルヘキナリ要スルニ我カ審美学ナル者ハ彼ノ形而上学トハ其運命ハ共ニスル者ナルヘシ

（本保義太郎筆記森鷗外美学講義ノート。後述）

と述べている。岡倉が美学すなわち西洋美学を重視していたことは、「日本美術ノ滅亡坐シテ俟ツヘケンヤ」（『大日本美術新報』第二十四号。明治十八年十月三十一日。筆名鉄槌道人）の論説の中で「現今百事日新ノ風潮ニ伴ヒ美術ヲ振興セントスルニハ泰西美學ノ眞理ヲ適用シ眞正着實ニ勸奬スルノ外ナシ」云々と、その必要性を力説していることからみても明らかである。

## 2　日本美術史講義

岡倉の講義の中で古来著名なものは日本美術史講義である。既に日本美術院版『天心全集』（大正十一年）をはじめとして聖文閣版（昭和十一年）、六藝社版（同十四年）などによって世に紹介され、また、新たに編集し直したものが創元社版『天心全集』（同十九年）、筑摩書房版『岡倉天心全集』（同四十三年）に収録され、一般に知られている。さらに、近年の平凡社版『岡倉天心全集』に至っては、原安民の筆記ノートを土台にし、他の受講生のノートや既刊本を参考にして新しく編集した、岡倉の講義に最も近い内容のものを収録している。

この講義は、今日から見れば誤った部分も多々あるが、日本美術史学の草分けとして画期的意義を持つものであることは一般に認められている。それは、長く古美術保護行政に携わり、意欲的に調査を行なって夥しい美術品に触れ、また同時に日本や中国の歴史書、画史などにもよく目を通し、岡倉にしてはじめて成し得るような内容豊かな講義であった。当時は帝国大学などにもこの種の議義は行われていなかったので、帝大生のあいだでも岡倉の講義の筆記ノートは珍重されたという。斯くして本校生徒のみならず、校外の後進をも啓発し、斯学発展の契機を作ったのであった。ただし、岡倉によるこの講義が飽くまでも作家のための講義として行われたものであったことを忘れてはならない。序論の中で

「美術史を研究するの要、豈啻に過去を記するに止まらんや。又須らく未来の美術を作為するの地をなさざるべからず。吾人は即ち未来の美術を作りつゝあるなり」

と言っているように、将来美術家となろうとしている生徒たちに、彼らが日本美術史上のいかなる地点に立っているかを示し、勇気づけ、己れの信じる方向へ誘導しようという熱意が籠められていたの

である。

講義の内容は上記の平凡社版『岡倉天心全集』第四巻（昭和五十六年）所収「日本美術史」に明らかであるが、概要のみを言えば、序論で先ず歴史の意味、美術史研究の必要性、日本美術史学の現状と今後とるべき方針、講義の進め方等を述べ、本論は先ず推古以前の美術史として、最初に美術の発生とその条件、日本美術の発生等について述べたのち、推古以前の遺物について解説する。次に推古以後に移り、そこでまず自ら立てた日本美術史の時代区分を説明する。岡倉の講義の最も独創的な点はこの時代区分で、最後の総叙の項でも再度説明を行っているが、その区分法は初出のものと少しく異なっている。左記は総叙で示している時代区分である。

岡倉は、奈良朝時代の美術の性質は理想的にして壮麗、藤原氏時代は感情的にして優美、足利氏時代は自覚的にして高淡であると述べ、また、この三つの時代をそれぞれ古代、中世、近世と称してもよいとしている。彼はこの時代区分に基づき、外来文化を摂取しながら独自のものをつくり出してきた日本美術のダイナミックな盛衰の跡を辿るとともに、盛衰の要因を探り、教訓を導き出し、それを生徒の指針にしようとしたのである。推古以後は次の順序で講義をすすめている。

- 奈良朝時代
  - 推古帝時期
  - 天智帝時期
  - 天平時期
    - 第一期
    - 第二期
  - 弘仁時期
- （平安朝）藤原氏時代
  - 藤原時期
    - 延喜時期
    - 源平時期
  - 鎌倉時期
    - 第一期
    - 第二期
- 足利氏時代
  - 東山時期
  - 豊臣時期
    - 寛永時期
    - 寛政時期
  - 徳川時期

推古時代、朝鮮経由支那文化伝来による文化発達、仏教美術の伝来、支那美術史（夏、殷～六朝）現存する推古時代美術品

天智時代、インド・ギリシャ風美術の伝来、西洋古代史（アレクサンダー東征まで）インド・ギリシャ風仏像作例

天平時代、奈良朝文化概論、第一期作例、第二期作例、天平美術の特質と教訓、作者伝

平安時代、時代概説、文化交替の要因、唐朝文化の影響、唐朝美術史、藤原氏時代（空海時代、延喜時代または金岡時代、源平時代）の特質、作例

鎌倉時代、美術の性格、第一、第二期各作家、作例、第二期における宋の影響、宋時代美術史

足利時代、時代区分再説、足利時代（近世）美術史の四区分（東山時代、豊臣時代、徳川時代 寛永時代 寛政時代）、各時代の作家・作例および特質

総叙、時代区分再説、美術盛衰の要因

なお、講義には多くの写真、スライドを用い、また、実物を見学させたりしたようである。

### 3　西洋美術史講義

岡倉の西洋美術史講義は前出平凡社版『岡倉天心全集』第四巻所収「泰西美術史」によってはじめてその概要が一般に紹介された。こちらも日本における最初の西洋美術史の講義として歴史的意義を持つものであるが、かつては日本美術史のみ注目されてこれは無視

され、そのために資料収集に進展がなく、平凡社版編集の段階であらためて収集が行われ、多少新資料の発見もあったが、それも十分とは言えず、その「泰西美術史」にしても暫定的性格のものとならざるを得なかった。

資料とは美術学校生徒による下記の筆記ノートである。①原安民筆記「西洋美術史」一冊、②高橋勇筆記「泰西美術史」一冊、③筆記者不明「泰西美術史」一冊（本学附属図書館脇本楽之軒文庫本）、④「OHASHI・SOJI」印のある「美術史筆記、壱集」「泰西美術史、近世之部」各一冊。平凡社版の「泰西美術史」は②を基に、④を参照して加筆し、部分的に他の筆記ノートから補うという編集方法がとられている。右の資料は孰れも明治二十四年度（同年九月～翌二十五年七月）開講の講義筆記であるが、④は二十四年九月から二十五年にかけて行われた長期講義の筆記であり、①②③は年度末の二十五年五月の一ヶ月間に行われた短縮講義の筆記であって、密度に大差がある。平凡社版が双方を併用したことにはやや問題があるが、④に大きな欠損部分があり、それを補う資料がほかに無く、簡略版と併用せざるを得なかったのであって、岡倉の講義の内容をできる限り詳しく紹介するためにはそれもやむを得ないことだったと言わねばならない。

ところが最近になって④の欠損部分を補うだけでなく、かなり出来の良いノートが発見された。それは第二回入学生菅紀一郎（前出430頁）のノート「泰西美術史、上世之部二」「同、中世之部 近世之部 三」各一冊である。前者の表紙には「明治廿五年三月　美術學校長兼教授岡倉先生口授、同校繪画專修科第二年生菅紀一郎筆記」とあり、後者の表紙には「明治廿五年六月、美術校長（ママ）（以上同前）」と記されている。両方とも毛筆および鉛筆で清書したもので、もとの筆記ノートの断片なども残っている。前掲④のノートと比較してみると、同一講義の筆記であることがわかる。表紙の年記は④の年記（④も清書本であり、そのもとの筆記ノートに受講の日付が記されている。）と一致しないが、これは菅が受講後しばらく間をおいて清書したときの年記を記したためと思われる。

かくて二十四年度の長期講義については二種類のノートが存在することになった。岡倉の西洋美術史講義は度々の履習規程改正その他の事情により講義期間や生徒の受講年次に変動があり、それと現存資料等を勘案すると、この年度の講義が最初でしかも最も長期間に亘る講義であったと思われる。その内容が第一講（前掲④の筆記本の方にメモがあるのみ）以外については割合い正確に把握できるようになったのである。ここではその内容項目の紹介に止めるが、平凡社版の簡略に過ぎることによって起こり勝ちな一般の岡倉西洋美術史に対する誤った認識を是正するために、この二種のノートを底本とする新たな「泰西美術史」が編集されることが望ましい。なお、岡倉は講義の参考に種々の洋書（歴史書、美術書）を用いたことが考えられるが、中でもリュプケの美術史（WILHELM LÜBKE, History of Art, 1874）をよく用いた可能性が大きい。また、東西の関係、比較を常に念頭に置いて講じ、西洋美術の長所なり短所なりを批評している点で、単なる西洋美術史の解説と違った独特の内容のものであったといえよう。

明治二十四年度岡倉覚三西洋美術史講義内容項目

（片仮名表記の部分は両資料を検討し、より一般的な方を採り、なお問題の多い部分には〔〕に註を入れた。）

序論

人類の起原に関する諸説、美術発生の順序、開化の四要因、西洋美術史時代区分および各時代の概要

古代（埃及・メソポタミア～羅馬帝国東西分立 A. D. 395）

埃及美術

埃及の起原、人種、美術の性質と原因（風土、政治）、時代区分

建築、第一期（B. C. 4000ないし6000頃）

ピラミッド、ピラミッドの起原（宗教説、墓の進化論、地勢説）、チョプス〔クフ〕・Chephren・メンケラおよび臣下のピラミッド、モンミー（ミイラ）

第二期（B. C. 4000～B. C. 3500 ヒクソス時代）

第三期（B. C. 3500～B. C. 2500）

寺院建築、埃及の宗教、寺院構造、スヒンクス

彫刻、埃及彫刻の位置と性格、主題、作例、素材

絵画、彩料、画法の特色、薄肉もの

アッシリア・バビロン（メソポタミア）

中亜細亜の概念（地勢、人種）、聖書の中のバビロン、遺物の状況、英仏の古跡発掘、Cuniform 解読とアッシリオロジー、メソポタミアの都市と民族興亡、バビロンの遺跡（カルデヤの祭壇、カルデヤの宗教、天文学）、アッシリアの遺跡（ネブカドネザル王の宮殿、構造の特色、彫刻物）、絵画と彫刻（バビロンの絵画、アッシリヤ彫刻の素材・主題・薄肉もの・サルタナパラスの彫刻、アッシリア絵画）

波斯

地域と人種、歴史、宗教、波斯滅亡とローマ美術への影響、恢復期（サセニヤン国〔ササン朝〕）の美術と法隆寺宝物、今日の波斯、波斯美術の特質（メソポタミア美術・埃及美術の影響および独自性、希臘美術との関係）

フヘニシヤ

地理上の位置と美術の性質、タイル〔テイルス〕の紫、植民地、ブロンズの発明（ウエールスの錫とサイラツプス〔キプロス〕の銅）、造船（レバノンの木材）、墳墓、打出し金属品、象眼

猶太

人種と地域、人種の性格、歴史（モゼス〔モーゼ〕、ダビット、ソロモン、耶蘇誕生）、美術

リデア

地域、クリーサス王の富、ライダス王の黄金

希臘

希臘文化が欧州文化（文学、哲学、美術、政治制度）の根源であること。東洋への影響、希臘と日本、希臘文化発達原因（地形風土と美術の喚起）、地勢、ヘラスの四種族（ドリアン、アイオニアン、北方居住人種、アケイアン）、アイオニアン（アゼンス）とドリアン（スパルタ）の抗争、植民地、希臘文化の東洋起原と固有の発展、日本と支那

歴史、時代区分、歴史前と歴史時代 B. C. 776 第一回オリンピア以降、正史の時代

区分

第一期（歴史以前、ホーマー時代）

アルゴノートの遠征の物語、トローイ物語、ホーマーのイリヤッドとオデッセー

第二期（歴史時代〜巴斯人攻入）

貴族の募人政治とスパルタの王制、スパルタ（国風、政治制度、法律、貨幣、習慣、教育法）、アゼンス（政治制度、法律、国風）、ペルシャ戦争史

第三期（ペルシャ戦勝〜マセドニア攻入）

戦勝と文化勃興、希臘と波斯等との交通、盟主アゼンス、ペリクレス時代、パルセノン（フイジアス、遺跡破壊と遺物の所在）、俸給制度、アゼンスの文とスパルタの武、両者の抗争と内乱

第四期（マセドニア攻入〜アレクサンドル大王の死）

マセドニア史（人種、フィリップ王、ファランクスの兵法、アレキサンドル王の遠征

第五期（アレクサンドル王の死〜ローマによる征服）

希臘の衰頽、領地四分

宗教、オリンパスの神々（ゼウス、ネプチューン、トリトン、ニンフ、ミノルバまたはパラス、マルス、ヴィナス、プリュトー、アポロ、ダイアナ、ヴァルカン、ヘルミース、ミュゼー）、宗教と美術

文学、韻文（ホーマーの名作）、演劇（世話物（トラジデー）と滑稽物（コメジー））、演説法（デモセネス）

哲学、印度哲学との関連、哲学諸家（ピサゴラス、エンピドクレス、ソフィスト派、ソクラチス、プラトー、アリストートル、ストイック派、エピキュリアン派、スケプチック派）

理学、ユークリッド幾何学、アルキミーデスの物理学、トレミー派天文学、ピポクラテスの解剖学

美術、建築、第一期、墳墓と城郭、埃及・アッシリヤ起原の構造、城門石垣構造の進化、アーチの源

第二期以降、三種のスタイルの発展、建築構造と風土、三種のスタイルの概要、ドーリック式の特色・パルセノン、アイオニック式の特色と東西混交的性質、コリンシヤン式の特色とアカンサス柱頭の起原・伝播、公共建築

彫刻、第一期、亜細亜より伝来したること。マイケネーの城門の獅子、ホーマー時代の彫刻

第二期、鋳造術の進歩（グータデス、亜細亜の鋳造術の伝来）、大理石彫刻（巴斯の大理石彫刻、メラス）、クリスエルファンティーヌ（クライゼルファンティーヌ）、彫刻進歩、アルケイスチック、ヲナタスの彫刻、アゼラダスとその弟子、マイロン（デイスコボラス像、ラダス像、サトル像（サティル））

第三期、フィジアス（略伝、パルセノン、アセニー像、オリンパスのジュピター像、作風の理想的なること、弟子アルカメニス）、ポリクレータス（作風の写生的なること、人物の割合、ド

リュフォラス像、アマゾン像、ルドビチーのジュノー像)、カリマカス、感情的の彫刻、ケヒソドス、スコーパス(Niobed 像)、プラクセテレス(ヴィーナス像、ヘルミース像)、Venus de Miro 像

(第四期)、リセップス(アレキサンドル大王の肖像、アレキサンドル大王と騎馬武者の群像、希臘彫刻の終焉)

(第五期)、クレオメネス(Venus de Medici像)、ロードス島の彫刻(ラオコーン像、ファルネーズ・ブル像、アポロ・ベルビデール)、ペルガモン派(ダイイング・クラジュートル)、アガシアス、アポロー・ジテール像

絵画、希臘 Vase、Pompei 発掘品、羅馬古蹟のモザイク、希臘絵画の起原、第二期終り〜第三期初め(ポリグノータス、マラソンの戦の画、トロイの戦の画、アガサ〔アガタ〕リヲース〔ルコス〕とアポロドラス、Scenography、実物近似、ゼウクシスとパラハセウス〔パラシウス〕)、第三期(パンヒラスの実物主義と画学校、アペレースとプロトジェネス)、実物模写と絵画の衰退、希臘の画法(フレスコー、蠟画〔エンコースチク〕、モザイク)

総括(表)

羅馬

文化の東遷・西遷、羅馬文明の欧州文明史上の意味、エトラスカ美術(エトリューリヤの地域・人種、墳墓、石棺、カピトリンの狼、アーチの発明、素焼土器、銅器、大理石彫刻、鏡、ルーヴル博物館起原)

羅馬史時代区分

第一期(建国B.C.753〜B.C.509、王国時代)

国の成立、制度(パトリシヤンとプレビヤン、王、元老院と民撰議院)、宗教(羅馬諸神、英語曜日名由来、陰陽師)

第二期(B.C.509〜B.C.31、共和国時代)

ゴール人侵入、羅馬の以太利全土征覇、カーセージ〔カルタゴ〕との海戦、領土拡大

第三期(B.C.31〜A.D.395、帝国時代)

オクタビヤス・シーザル帝、オーガスター・シーザル帝時代の泰平と文化奨励、以後の諸帝の悪業、ポンペーとヘルキュリアム、トレージャン帝の美術奨励、凱旋柱、凱旋門由来、アドリヤン帝の墓、寺院、劇場、諸帝事跡、明君コンスタンタイン時代、中世羅馬、羅馬史総括、西洋美術史時代区分

美術、羅馬美術と希臘美術の比較、羅馬美術の特質、建築と肖像

建築、(第一期)、エトラスカの影響、アーチと水道建築

(第二〜第三期)、希臘風の影響、大劇場、パンテオン、ポンペーの住家、コロジヤム、タイタス帝の湯殿・凱旋門、コンポジットコラム、コンスタンタインのアーチ、サントアンジェローの城、カラカラ帝

の湯場その他

彫刻、第一期、エトラスカの影響、ジュピトル像

第二期、エトラスカと羅馬の混合、希臘風

第三期、希臘人の製作、ナイル河の寓意の像、肖像の流行（二種の肖像、帝王像、女の像）、石棺

絵画、第一期（エトラスカ風、四種の彩色）、第二期（希臘風、肖像流行）、第三期（ポンペーの壁画、縁どり、色線）

美術工芸、美術工芸の進歩、ランプ、杯、甲冑、クレター ル、貨幣、金銀宝石彫刻

中世（A. D. 395～1495）

中世史概要、中世史研究の必要性、中世史三区分と各期の美術の性質

歴史、第一期（A. D. 395～900）

羅馬周辺諸民族、サラセン種族、東帝国ビザンチーンの開明

第二期（900～1200）

欧州の形勢、十字軍、アラビヤ文化の影響

第三期（1200～1490）

欧州諸国の成立、文化の動向、キリスト教

美術、第一期

耶蘇教美術、建築（塚穴遺跡、バシリカの構造、バプチッセリー）、ビザンチーン美術との相異、ビザンチーン美術、建築（バプチッセリーとバシリカの集合、セント・ソフィア寺院、建築装飾）、彫刻（初期の羅馬風、象牙彫刻）、モザイク

アラビヤ美術、建築遺物（埃及風、スパニヤ風、印度アラビック）、グラナダの宮殿、露西亜の建築

第二期、ローマネスク、時代概説、ローマネスク美術の性質三種、

建築、発展の原因、独逸の作例、特色、ピッザーの建築、セント・ミニヤトール寺院、パレルモ寺院、サン・マルコ寺院、ローマネスクおよびゴシック建築の解釈、仏国の作例、ローマネスクとビザンチーン式、トランゼーション、ゴシックへの移行、北欧およびスペインのローマネスク建築

彫刻、ローマネスク彫刻の性質・用途・主題・素材、七宝の種類、伊太利に於ける自由的美術の萌芽（ニコロ・ピザノ）

絵画、モザイク、イルミネーション、チマブエ、ドチョ（ドッチオ）

第三期、ゴシック、ゴシックの語源、時代概説（王権拡大と法王権力の衰微、新美術の発生）

建築、構造の特色、仏国（ルアン、シャトル）・オランダ・独乙、英国、伊太利・スパニヤに於ける作例、

彫刻、建築装飾の煩雑、彫刻の新需要、仏国のゴシック彫刻、木彫の隆盛、彩色木彫、伊太利彫刻の

開化（ヂョバンニ・ピザノ、ヂオット、アンドリヤ・ピザノ、オルカニヤ）
絵画、北方（ステヘングラス〔ステンドグラス〕、イルミネーション）、伊太利（ヂオット、オルカニヤ、スピネロ、サイモニイ〔シモーネ・マルティーニか〕、フラ・アンゼロ〔アンジェリコ〕、パビリヤノ）

近世（一四九〇頃～十九世期中頃）
近世の特質および時代概説、近世美術の三要因、美術の独立、建築・絵画・彫刻の独立
建築
初期復古時代 Early Renaissance（一四五〇～一五〇〇）
ゴシックの反動、伊太利諸都市（フロレンス、ベニス、パドア、羅馬）、ブルネレスコ（サン・ロレンツォ会堂〔サン・ロレンツォ会堂〕）、ルンゾ、パラツォー・ピチー）、バネデトー・マヤノ〔ベネデット・ダ・マイヤーノ〕、アルベルチ、ロンバルヂーノ
高等復古時代 High Renaissance（十六世紀）
羅馬法王ジュリアス二世の美術奨励、ブラマント、マイケル・アンゼロ
複雑時期 Bizarre（十七・八世紀）
各国への影響（仏国、スペイン、独乙、英国）
初期復古時代彫刻
デラホンテ〔デラ・フォーレ〕、ギベルチ（フロレンス灌浄堂扉、半肉の模範）、ルカ・デラ・ロビヤ（耶蘇の母の半肉）、ドナテロ（ガッタメラータ像）、ベロッキヨ（コレオニー像）他
初期復古時代絵画
各地方流派概要、フロレンス流（特色、パオロ・ウツチェール、マサリーノ、マサッチオ、フヒリッポ・リッピー〔フィリピー乙〕、フヒリピー・リッピー、サンデロ・ボテシェリー、ギルランダイヨ、ルカ・シニョレリー、ポラユオル〔ポライオロー〕、ロレンゾ・クレデー）、パドア派（特色、スクァルチョニー、マンテニヤ〔ピエロ・デラ・フランチェスカ〕、フランチェスカ〔フランチェスカ〕、アンブリヤ派（特色、ペルヂノ、ジョバニ・サンチ、ピントレチヨ〔ピントリッキオ〕）、ベニス派（アントネラ・ダ・メシーナ、メッシーナと油絵技法、ブエリン〔ベリーニ〕一家、彩色の模範）
高等復古時代彫刻
彫刻の衰兆と四原因、リヲナルド・ダビンチ、ジヤランチミー〔?〕、サンソビノ、ラフィエル（下絵）、マイケル・アンゼロ伝、ベンベニウト・チェリニ、ジョバニ・デ・ボロニヤ、バッキヨ・バンデネリ、アンドリヤ・リチヨ、ジャコポ・サンソビノ
十六世紀絵画
絵画発達の経緯、リヨナルド・ダビンチ伝、ベルナルド・ルイニ、ソドマー、ピヲンボ、バサリー、フラ・バトレメヨ〔バルトロメオ〕、アンドレヤ・デル・サルト、ラフェエル伝、コルレジヨ、チッシヤン伝、モレットー、チントレット、ポール・ベロニーズ
北方独乙美術、美術の特色
彫刻、伊太利の影響、木彫流行、ニウルンブルグの鋳物、ヴィシェル
絵画、バン・アイク、独乙絵画の（伊太利ほどには）発達せざりし所以、長所、ホルベイン、デウラル、ルーカス・ク

ラナック、クルーエ

十七・八世紀の美術、美術の衰頽

彫刻、劇場時代、ベルニニー、アルガルデー、プジェー、ジラルダン、シリゥタル、十九世紀彫刻の進歩

絵画、フランダル、社会変化と絵画の変化、肖像画・風俗画・歴史画・山水画・浮世絵（ジャンヌル）・花鳥動物画・スチルライフの分立、写生の支配、カラッチー、ギドー・レニー、スルバラン、アラソ・カノー、ブエラクエ（ヴェラスケス）、ムルリヨー（ムリリョー）、ルーベンス、バンダイク、レムブラント、ジョルダーンス、デサー、メングス、プーサン、ミニヤルド、レーノルド、マイエリス、ブルーゲル、テニヤルス、クーサン、クロード・ゲレー、サルベートル・ロザー、ライスデイル、ホビマ、ジャン・ビース、ポール・ポッター、ウーベルマン、カイプ、マイダルス、ジョーン・フェット、ド・ヒーム、ハイサム

十九世紀の美術、社会変動、前半期（復古時代）と後半期（写生主義）の区分、世間全体の考えに訴える絵画、絵画と建築の結合、彫刻興隆、北方中心の美術

前半期、建築に於ける復古、彫刻興隆（カノーバ、トルワルスデン（トルヴァルセン）、シャドウ）、ダビッド、バリー

今日の美術（彫刻）、アカデミーのファルゲール、メルシエ（メソニエ）、ゴーデース（ゴーデンス）、早取派ルーダン（ロダン）の作風

（前記簡略講義筆記のノートには絵画に関する箇所もあり、ミレー、コロー、「インプレッショネッス派」について短い言及がなされている。）

## 福地復一の東洋美術史講義

福地復一（317頁参照）の東洋美術史講義は秋山要治（明治三十二年彫刻科卒）の筆記ノート「東洋美術史　巻壱　福地先生口授筆記」によって内容の一端を知ることができる。筆記の時期は明治二十七年から二十九年の間であると推測される。内容項目は左記のとおりである。

日本の国土、国の開化の条件（地勢風土）、日本の地勢風土と美術との関係

日本人の性質および風俗、日本人の起原に関する諸説、日本美術の発生と特性

推古以前の美術、作例解説（図示）

日本美術史の時代区分

古文献に登場する美術関連事項（神武～崇峻）

神功皇后征韓以後の朝鮮の影響、朝鮮の歴史（人種と国の変遷、日本との関係、朝鮮各地）

支那の歴史（人種の起原と種類、三皇五帝より六朝までの各時代の文化）

印度の歴史（地勢、風俗、人種と性質、衣服、仏教の現状、仏教の道理、開国より釈迦の登場までの歴史）

なお、時代区分は岡倉の区分法（469頁参照）との対照の意味でノート原文を左に掲げる。